

歌誌「多磨」の歴史

藤 田 福 夫

はじめに

北原白秋中心の歌誌「多磨」は昭和十年六月、白秋自身の題字、白山春邦の水色の卵の見えるこゝりの巢を描いた織細清楚な表紙絵、唐の壁画写真の口絵、アンカット形式の高踏の体裁をもって創刊された。発行所は白秋の弟北原鉄雄の「アルス」であった。「多磨」は比較的短期間に参加者が増し、伝統の長い「アララギ」と並んで太平洋戦争前の最も大きい短歌集団に成長した。都市的小市民層を主なる構成地盤として当時の古典尊重の時代思潮に棹さしながら目ざましく充実した美しい世界を構築したのである。その新古今集風の近代幽玄調は都市型青年子女にとって敵しい冬の時代における一つのオアシスであった。

こうした状況の中で潑刺と誕生した「多磨」において女性も含めて多くの新人が養成されたが、昭和十七年十一月主宰者白秋が死去した。その後も雑誌は門下によって引継がれ、昭和十六、六年頃からは漸次国民主義的色彩を強めつつ刊行を続け、太平洋戦争後二十七年十二月第三十五卷（半年を一巻としていた。）第二号を終刊号として光栄ある歴史を閉じた。口絵には弟鉄雄が撮影した三崎見桃寺の白秋歌碑の写真が見られ、白秋の生涯を物語るかのごとくであ

る。

白秋没後、「多磨」は門下によって合議制をもって継承されていたのであり、なお刊行を続けることも可能だったというが、(終刊号、木俣修氏「多磨」短歌会の解散について) 主宰者が居なくなつて「多磨」を方向づけることが不可能になつたために終刊に決したものという。しかし「多磨」で育つた人々は幾つかの門流に分かれつつも今日なお脈々として歌壇に大きい支配力を及ぼしている。

白秋の師与謝野寛が死去したのは「多磨」創刊と同じ昭和十三年の三月であり、「多磨」は明治以来の新詩社の精神を文芸思潮的に継承するところがあった。「多磨」第二号の巻末に「与謝野寛遺稿歌集」(明治書院)の大きい発売広告が見え、また白秋が「短歌研究」「与謝野寛追悼号」(昭一〇、五)の「与謝野寛先生」において大正歌壇が寛に与えた冷遇に対して「わたくしは弔ひ合戦に立つ気で立つ」と述べているのもこの辺の事情を象徴している。

本稿はこの「多磨」についてその「創刊事情」「理念」「発展とその人々」について概観を試みようとするものである。

一 創刊事情

北原白秋が早く自ら主宰した短歌関係の雑誌には明治四十四年から大正二年五月まで十九冊を刊行した「朱鸞」(ザムボア)、大正三年から四年に至つた「地上巡礼」(全六冊)と同四年の「ARS」(全七冊)大正五年の「煙草の花」(全二冊)があり、いずれも短命であつた。この他に木下杢太郎、長田秀雄と共同で編集した「屋上庭園」(明四二、一と同四三、二各二冊刊行)があつた。その後大正十三年四月、前田夕暮らと協力して創刊した「日光」があり、有力

者多数が諸方面から参加して注目をひいたが、集合体的性格のため主要同人の協力関係が破れて昭和二年十二月廃刊した。(椋山女学園大学論集七号、八号—昭五一、五二—拙稿「短歌雑誌『日光』の概観および総目録」上、下)

ついで白秋は昭和七年十一月と同八年六月に季刊の大冊「短歌民族」二冊を出している。これは内容形態とも豪華なもので、創刊号を手にしてその充実ぶりに驚いたものであった。白秋中心であるが、他派の歌人、知名の学者も寄稿し、かつての「日光」に近い性格のものであるが、統一に困難があり、僅か二冊で終わった。若い歌人では白秋系の「香蘭」の他「橄欖」「歌と観照」「歌と評論」「ごぎょう」などの人々が加わったものであった。中村正爾は「多磨」終刊号の「『短歌民族』から『多磨』へそして、編集のことども」において「『短歌民族』の会友並に会員の中から『多磨』の傘下に馳せ参じたものは」「穂積忠を初めとし、荒木暢夫、馬場静浪、北見志保子、今井規清、中村正爾……木俣修、……初井しづ枝、……宮格二……」と三十一名の名を挙げている。これらの人々は単に参加したと言うのではなく重要なメンバーとして作品、評論の両面で活動したことは「多磨」の誌面に躍如として見られるところである。「多磨」の最も中心勢力は「短歌民族」以来の中堅メンバーであったのであり、またそれらの人々の或る者は実務担当者でもあった。

「短歌民族」廃刊後白秋をして「多磨」創刊に踏み切らせたものに村野次郎の「香蘭」との関係があった。「香蘭」は大正十二年、次郎が創刊した後、白秋が顧問として臨んだ。しかし白秋は「多磨」創刊の前年あたりから既にその立場を離れていた。白秋は「多磨」創刊号の「雑纂」の中の「香蘭の件」において「香蘭」の責任が村野次郎個人よりも「幹部数人の合議制となり」責任は次郎よりはむしろ顧問たる白秋にかかって来たため顧問謝絶を申渡したと言い、「香蘭」の歌風も熱意も白秋とは違ったものに見えて来た。そして村野も白秋無用論を放言したことがあるという。この問題は村野次郎を引退させることによって解決したかに見えたが、「香蘭」の在京幹部によって揉み消され、

合議制は破壊され、地方幹部の努力が無になって再び村野次郎主宰の新「香蘭」が出ることになったというのである。木俣修氏はこの問題について「多磨精神とその歌風の展開」上（「多磨」昭一三、六）において、事件の内容には触れられていないが「私などは直ちに香蘭を脱退し、白秋主宰の新雑誌を創刊すべきことを提唱した。……」と言われ、また昭和九年十一月二十九日付の次のような白秋書簡を引用紹介していられる。

「香蘭の顧問勇退の件すべてかうなるべき事であつたと思ふ。君はすべてを知つてゐる。君の態度は正しい。これから私もみっちり、私を継承してくれる僅かの人々のために尽さうと思ふ。君は正しく処置してよろしい。……」という手紙である、そして氏は「よくよく考へて置く」とあるのは新雑誌創刊の件に關してである。」とされ、この時期に白秋はまだ新雑誌の創刊を最後のに決断してゐたのでないと言われる。しかし白秋は先に大正十五年自ら編集して創刊した詩誌「近代風景」が昭和三年に廃刊してしまつており、「日光」「短歌民族」また廃刊後であつたから、自己を中心とする雑誌を持つことを期待したのは当然のことと思われる。

木俣氏はさらに、昭和十年はじめ、在京の白秋門下や地方の主なる門下によつて打合会が開かれ、二月末に至つて四月二十日頃に創刊号を出すに決したが、三月二十日頃の相談によつて実際の創刊は同年六月になつたと言われる。

四月七日の創刊準備会に集まつた人々は白秋をはじめ木俣修、穂積忠、馬場静浪、中村正爾、横地信輔、巽聖歌、水谷静子、清水乙女、北見志保子、鐸木孝らの十六名であつたという。（「多磨精神とその歌風の展開」木俣修。「多磨」昭一三、六）

「香蘭」問題で心痛めていた白秋に新雑誌創刊の最後の決意をさせた人々の基礎づくりの苦心と創刊時から編集集業務に従事した中村正爾の事務的な苦勞は大きいものがあつたと想像される。これとともに白秋自身も単に充実した作品、文章を発表するだけでなく、各段階の作品欄の歌を自ら選したという。（終刊号「作品展開の線に沿つて」桂静子）

要するに種々の力の結晶として「多磨」は充実した誌面を提供し得たのである。

中村正爾はまた次のように白秋の精神を奉じて編集事務に従った実態を記している。

「……多磨創刊号以来の編集は、その発行所がアルスであった関係もあって、ひきつづいて、この私が担当したものであるが、もちろん実際の編集責任は、各号の『雑纂』に於いて審かである。私の立場はただただ白秋主宰の企画を、理想を、氣品を、いかにして誌面に反映するかについて、些か苦心して来ただけのことで、自らの創意などは殆ど皆無に近いと思つてゐる。……」ときわめて謙虚である。ついで「昭和十六年七月から発行所が現在の阿佐ヶ谷の多磨短歌会に移され、編集陣には新しく泉甲二、岩間正男の両君を加へ、それぞれ交替して編集の實際面を担当した。……」とあり、さらに「〔注、白秋没後〕直ちに第一部委員会を開き編集委員会を設定し、更に多磨の発行を敢行することに決定、先づ木俣修が編集を担当した。……中略……。編集のバトンは次いで泉甲二に渡り、更に終刊まで私が担当し、やがて昭和廿七年秋の白秋十年祭を迎ふるに至り、ここにつひに解散を決意し、……」と事務上の歴史を要約して述べている。編集者の推移については内部事情が種々存在したと思われるが、具体的なことは局外の我々には察し難い。

はじめは各種の創作活動にあわただしい主宰者を助け、またそれに続く主宰者の発病期を支え、死去後の物資欠乏の戦時期を乗り越えた編集関係の努力は並々ならぬものがあつたと想像される。創刊時の主宰者白秋の大きい指導力が没後十年の年月、集団を導いていたのである。

二 「多磨」の理念

百六〇ページの堂々たる量感と新鮮高雅な装いをもつて刊行された創刊号の巻頭には白秋の「宣言」があり、つづいて「多磨綱領」が掲げられ、新古典的象徴主義の理想を歴史的な立場から主張した。木俣修氏の「創刊当時」(「多磨」昭二四六)によれば、昭和十年五月三十一日、九州への旅の途中の白秋は同氏に絵葉書を発信し、その中に「多磨見たか。この意気と香氣と氣韻は無比なるべし」と記しているという。当時の白秋が意気軒昂たるものがあつたことがよくうかがわれる。創刊号にはじまる綱領は一巻四号まで続いた。これと並行して白秋は一号から三号までの「多磨の鑽」(注、添削例)「短歌私史」(一ノ四、一ノ五)「律動美論」(一ノ四)など力を入った文章を書いている。また作品では一号以下、内容的に充実した「春昼牡丹図」(一ノ二)「雲仙つつじ」(一ノ二)などを発表した。「童女幻像」(二ノ四)の三十二首、「山河哀傷吟」(一ノ五)の九十一首は特に重厚味ある大長篇でもある。

さて「宣言」並びに「綱領」を要約すると次のごとくである。

「宣言」は「多磨綱領」より活字号数を落して発表されているが、実質はつゞいて発表された綱領を要約した形のものであり、装飾体風の綱領に比し、実質性を持っている。また文末に「多磨」の語義を説明している点が注目される。次の「宣言」の第一段落は「宣言」全体の要約と見られる。

「多磨短歌会創立の真意を為すもの、常に日本短歌の本流にありて、此の定型の精神と伝統とを継承し、更に近代の感覚と智性により、万づ現当に処し、其の光輝ある未来の進展を思念し実現せむとするにあり。」というものである。以下、短歌が国民詩として一つの定型を有すること、個性の開顕に忠実であること、万葉集、古今集を重んずる

が、それに迷眩するものでないこと、近來の歌壇は混亂し、律格香氣が失せていること「多磨」は日本の短歌の正統を奉ずるものであることを説く。そして自分は浅学菲才だが、門下解放以來二十年過ぎた今日なおその係累は生きつゞけているので、道を正しく伝えるために決意し、知命の齡を踰え、丹田に胆を下ろして徐かに歩み出そうとするものであるといっている。つゞいて世の現実と説くものは皆仮幻である。虚しく無きがごときものの中に信実の心を以て実体を覷、聴きしなければならぬ。これは決して風流韻事でなく、一生の業だという。ついで「多磨」の語義を記して、「和漢三才図繪」の

石瀝玉、則氣如白虹精神、見於山川也、但將石映燈看之、内有紅光明、如初出日、便知、有玉也。

の文を引き、「多磨」の語韻は、玉であり、また白秋の居住地武州多摩にあつて内に白虹精神を知覚し、外茫莫たる多麻に遊ぼうとすると述べ、最後に

「新人よ來れ。『多磨』は同志の本地たらむ。風鳥は既に群れたり。」

と結んでいる。伝統を奉じつゝ、象徴精神と定型を重んずる決意と新人を集めようとする期待感が十分に汲みとられる内容である。

「多磨綱領」はこの「宣言」を敷衍して説いた形になっているが、装飾的な文章の中にも可なり具体的な叙述が見える。「多磨の精神に就いて」（一ノ二）では詩としての短歌は定型を重んじつゝ近代感覚と知性を総合して風色の無限感を生かし、純粹な芸術的態度で自己を生かし、驕を戒しめ、身命を賭して刻苦の道を行けという。次の「多磨の風騷に就いて」（一ノ一、一ノ二）は主として短歌の歴史を時代別に顧みたものであるが、その第一段では「宣言」にもあるように詩は「幽遠に霞み」「また現前に活動する」ものであり「写意写生以上の香氣ある象徴の世界」がここに生じ「言語を断つ」ところのものという。ついで史的叙述に入り、上代の「樸茂」眞実を近代の感覚を以て捉える

ことが必要と言う。古今集の主智性ばかりを見て詞藻の都雅洒落を見ず、新しい自然観と技巧に目を塞いではよくないと説く。新古今集については特に多くのことを費し、「骨を鏤り、心を彫り尽」したその表現と新しい美意識は短歌を日本芸術の最高の象徴芸術としたが「円熟と靡乱とは紙一重」であり、その頽廢のみを責めて、「麗質の深い微笑と寂光の胚胎を」見出す者が近代の歌人に少ないのは遺憾であるという。よって「多磨」の新体は「華実十全」にあり、「直観を尊び、余情を思議の外に想ふ」ものと言う。中世歌学の因習期と戦乱時代における感情生活の早老現象を経て徳川期には古学が復興し、学匠逸士が多かったが、「実作は学説に及ばず、擬態に肩摩」し得なかったと説く。その時代において俳諧は日本における「第二の象徴詩運動」を成しとげた。続いて明治の新体詩時代に「明星」が出現し、「海のかなたの新唱」が「海潮の音とどろき」第三期の象徴運動となった。短歌もこの西詩の影響によって香薫され、昔時の和歌意識は全く相貌を変えた。子規の主張する簡朴なる写生説は「観入による写生或は伝神にまでの昂揚となり、必死の鍛練道として奉仕され」或る者は「極右のリアリズムによって、尽く時流を退け、浪漫精神を追ひ……自らを他の芸苑と絶ち」詩の精神を白眼視したのは「一種の攘夷であつた。」と大正期「アララギ」の所謂鍛練道を批判した。そうした風潮に対し「多磨」は「詩」への更生をはかる第四期の象徴運動を展開し「近代の新幽立体」を樹立し、「浪漫精神の復興」をはかるのである。ただしその浪漫運動は自分も年齢が知命を踰えているので既往のそれとは異なり、「象徴の玄義」を「円融の中心」において發揮しようとする。ここまでは「綱領Ⅰ」同Ⅱで説かれている概略であり、「多磨」の運動を象徴的文芸思潮の第四期として位置づけようとしている点が最も注目される。この運動は戦時に入つて歪曲されたが、なおロマン的傾向の源泉として戦後の歌壇に影響するところが大きかった。「綱領Ⅲ」は「多磨の風騷」を再説したもので、上述の説を総合した形である。風騷、氣品を重んじ、余香を芬らせる必要と共に新に、芸術には楽しみの必要があると説く。そして最後に世に象徴を説く者がその境

に味到せず、実作の縹緲たることを得ていないのは許されない。要は「感官の俊雋如何」であり、追隨的に己れを空しくして、しかも得るところの少いのは、觀念を以て聴き、知的技巧に走って「粉黛これ事とする」からであるという。この批判は「アララギ」に対するほど多くのことを費していないが「潮音」の思弁的傾向を持った象徵主義に對するものであり、手きびしい表現である。白秋の詩人的直觀的感覚的象徵と太田水穂の哲學的で流動性の乏しい觀念的象徵との違いが明らかに意識された発言であつた。「綱領Ⅳ」は「多磨の機構と表象」という題が与えられている。機構については集團の組織を述べたもので、その一心同体を強調し、「直門の結成」を説き、質の如何によらず「謙虚と信頼」「純正無垢」な心的態度が必要であるという。表象といっているのは「多磨」の集團を示すシンボルを意味し、「玉」がそれに当たり、それはかつて白秋が「桐の花」で短歌を美的に規定した「緑の古宝玉」であり、太虚の無限にまで広がる微粒の電子であり、また「十全体」的なものである。「多磨」は正統短歌の完璧球体であるが、伝統と言わずに正統と言っているのは滞ることなく正大の氣をもつて蒼古と呼び合っているからである。「正統にして、真に未來の青海波を思ふ者、此の本流詩精神にある。玉の幻術はかくして雲霧を岩の上に弾く。」と詩的な表現を以て全文を結んでいる。分析的、理論的な主張ではないが、象徵的表現に寄せる心の深さと独自の譬喩的表現の技法に注目されるものである。

右の「宣言」ならびに「多磨綱領」の主張は既に氣韻の生動と品格の整齊を説いた昭和九年四月刊行の歌集「白南風」の序文に源流を持っている。

「惟ふに風騒いやしくもすべからず。かの光明に参じ、虚実交々にして莊嚴の秘密を識る、畢竟は此の我を觀、我を識るなり。一なる生命の根源に貫徹すべきのみ。乃ち、心地清明にして万象おのづからに透映し、品格整齊にして氣韻おのづからに生動せむ。純情にして簡朴なる、幽玄にして富贍なる、情意臻って詞華之に順じ、境涯極に入つて

象徴の香気一に鍾る。……」

この序文の記されたのは昭和九年であるが、集中の作品はそれより以前のものである。「白南風」全体の新鮮さはその柔軟な新古典的象徴性にあるが、特に同集の昭和六年初夏から八年冬までの作に当たる「砧村雑詠」に象徴性が顕著である。

吾が窓よ月に開けば刈りしほの穂麦の矢羽根風そよぐなり「白南風」砧村雑唱

日あたりの枯葉のくぬぎはらからず霜晴の午の霽のしづけさ 同 同

などにそれが見られる。ただしこの時期の手法は「多磨」時代ほど稠密に表現を追求していない。素材もお田園風なものが多く、民族的古典調を濃厚に反したものではない。そのために軽快な調べによる親近感はあるが、練りあげられた、芸術的昂揚感とは「多磨」時代に入ってからが強いものと思われる。

白秋が「多磨」時代の歌風の実現に努力したことについて白秋は「白秋詩歌集Ⅳ」（昭和十六年八月刊。河出書房）の後記で次のように記している。

「……その年（注、昭和十年）の六月、私は愈々一門の歌誌『多磨』を創することになった。多磨短歌会の結成は、「溪流唱」によって機運動き、遂にその孟夏に到って、その白虹相を映発した。

而して多磨第一年、第二年はその新運動の草創期にあって、自他共に切磋琢磨した。茲に謂ふ多磨歌風の発祥を成すものである。」

これによれば白秋としては、「多磨」刊行の十年の新春伊豆湯ヶ島に二十日間滞在した折の「溪流唱」一連三十七首が直接的な「多磨」創刊の契機となったと考えていたと思われる。「溪流唱」は歌集としては没後刊行である。その「溪流唱」一連は大連作で、視点のきまった写生と対象を包む情趣とがよく融合し、密度の高い作である。冬の寂

光を漂わす山間の溪流に遊ぶ鶺鴒の姿に作者の心が染みこみ、一連全体があたかも静寂閑雅な淡彩の画面を幾つかつらねた趣である。光をかえすような鶺鴒と水沫の動きが焦点となり、溪流の気が象徴的に表現されている。

行く水の目にとどまらぬ青水沫鶺鴒の尾は触れにたりけり

岩つたふ黄の鶺鴒の影見れば冬の明りぞ澄みとほりたる

冬は観て幽かよと思ふしじに澄む青水沫あれば流るる泡あり

こうした作品を前提にしつつ「多磨」初期の充実した、重厚で光彩豊かな諸連作が発表された。

「短歌研究」(昭一〇、三)

牡丹花に車ひびかふ春まひる風塵のなかにわれも思はむ

「多磨」創刊号(昭一〇、六)

銀屏風なにかかぐるしくわうとして灯はあかれども箔の継ぎ見ゆ

(昭一一、四)

藤纈の花文の象はましろくてただに海らの命寂びたり

(昭一一、五)

多宝塔いまだに明き夕光をあそぶ童のひとりましつ

白き猫秋くさむらの照りにをり影のそよぎのうれしかるらし

(昭一二、一一)

いずれも巧緻な表現であり、対象の陰翳感を捉え寂光の世界を描き出している。新幽玄の理想が実現されたものと言ひ得よう。日常的に萎縮していたり、観念象徴に傾いたり、軽いモダニズムに流れていた当時の歌壇においてこれは源泉を中世古典にもとめながら新しく樹立された情調的象徴の世界であった。それは古典的日本美を尊重、愛慕する時代風潮を背景に大きい影響を白秋周辺の人々に与えた。次に白秋の感化力の作用している人々の作を「多磨」の初期から少しく引用する。

どこやらに柏手きこゆ月の夜の富士をろがみて寝につけるらし

穂積忠 (昭一〇、七)

夏めきて朝間は霞む塩田のしめりほどよき涼しさを踏む

荒木暢夫 (昭一〇、八)

館山のあたりと思ふ水平線にかすかに黒し戦闘艦のかげ

中村正爾 (昭一〇、九)

禅堂の夜座の心耳に澄むものは孟宗藪の笹鳴りかあはれ

木俣修 (昭一〇、一二)

沖はろか氷野のうごき徐々にしてまなこ凝らせば岸にせまるらし

酒井広治 (昭一一、四)

これら門下の主要作者は新幽玄風を学びつつ質的に充実した作を見せているのみならず、毎月二三十首ないしは四十首の力作を寄せており、青壮年期のエネルギーを以て作歌に当たっていたことが知られる。

このことは主要作者よりやや若い世代についても言えることであつた。次に一二の例を挙げておこう。

花信遅くいたづらに吹き上ぐ春嵐みちの道祖神はたちていませり

宮柊二 「白虹集」 (昭一一、五)

唐犬のなに思ひるむ眸のかがやき牡丹の花とあてに貴き

富倉良子 「白虹集」 (昭一一、七)

さて白秋の歌風は昭和十二年九月頃から白秋が眼疾にかかり、次第に失明状況に近づき薄明の界にあるようになったため幽暗な独自の境地に進んだ。

照る月の冷えさだかなるあかり戸に眼は凝らしつゝ盲ひてゆくなり

「多磨」 (昭一三、二) 「黒松」

春ふかき牡丹にぞ思ふかがなべて眼を病みてより幾とせ経たる

「多磨」 (昭一五、六) 「牡丹の木」

逆光の玉の白菊仰臥に見つつはなやげやがて見ざらむ

「多磨」 (昭一五、七) 「黒松」

これらには従来見られなかった心内の世界、暗い生命の秘所が見つめられている。外部感覚の歌人はここに深い心象の歌人に変貌し、も早他の追隨を許さぬものがある。白秋は没後刊行された「黒松」の巻末に「一生の重患に於て幸せられてゐる。」と記したが、これは誠に大きい犠牲の上に得られた諦観であつた。

白秋は十七年十一月二日、先に刊行した「黒松」(昭一五、八)を残して死去した。同年の「多磨」十二月号は「北原白秋先生葬儀録」となり、清水澄芸術院長、肉親、多磨短歌会会員、詩壇、文壇、歌壇、音楽界諸家の追悼文、葬

儀記録が掲載された。またこの十二月号から、表紙に従来「北原白秋主宰」とあった文字が「北原白秋創刊」となり、二十年十一月の歳末号に至った。（この二十年は六冊刊行に終る。）十八年六月号は追悼号である。巻頭に十六年八月の白秋の写真が掲げられ、さらに青年期以後の諸写真があり、河井醉茗、蒲原有明、木下李太郎、斎藤茂吉、里見淳、谷崎潤一郎、中山晋平、信時潔ら多くの詩壇、歌壇、文壇、楽壇の人々、肉親、門下の人々が稿を寄せ、白秋の広い交友を物語っている。年譜、著書目録、参考文献も比較的短期に編まれたものとしては整ったものである。没後刊行された歌集は晩年作を集めた「溪流唱」「牡丹の木」「橡」はじめ、中期作を集めた「風隠集」「海阪」である。この時期は物資欠乏のため、「多磨」ともども粗悪な用紙である。秀品を載せるには淋しい体裁であった。

白秋の死の前から日本社会の国粹化は強まり、「多磨」は昭和十五年一月号（第十卷一号）の表紙の背に2600の皇紀年数を横書にして入れ、扉に「皇紀二千六百年」を入れるに至った。この時期の作品などについては後に(三)の「多磨の発展とその人々」の項にも略記するが、白秋の指導精神は戦時色をきわめて濃厚に反映したものであった。大東亜戦争前の十六年七月号の巻頭言に白秋は次のように記している。

「多磨は一絲紊れぬ統制下を以てして、能く邁進する。独裁多磨はまた全体多磨である。多磨は草創より今に及ぶ個であり全であった。個の気魄とし、全の真実とした。和を以て貴しとするその和こそはこの多磨を白璧とする。……」

全体主義的独裁体制下における集団の団結と国粹的尚古精神による短歌形式の尊重整備が強く説かれている。しかし、この統制的な現実の中にあつて「多磨」の新象徴的手法が完全に壊滅し去ったのではない。右の巻頭言に

「蒼古の雲を雲とし山河をこの楔とする日本民族の血脈にあつて、我等は作歌し、この一貫した精神に於て、この伝統を極限にまで整律しようとする。……」「新感覚或は近代抒情といひ、象徴と称し幽玄と称するもの等々が、我がこの多磨と何らの縁由なきものとも思はぬ。その多磨歌風の浸潤に就ては、敢て亦自ら揚言しようともしない。……」

とあるのは方法的な面においてはであるが、象徴主義をなお見失うまいとする自己説得の声であった。

三 「多磨」の発展とその人々

「多磨」初期の歌風、理念については前項、前々項に記したが、ここでは出詠人員的な面と主要作者の戦時下作品面とからの見てゆきたい。第一年、即ち昭和十年六月から翌十一年一月までと十一年七月、十二年一月、十二年七月の各欄出詠者数は次のようである。

号数	出詠人員
10. 6	218
10. 7	274
10. 8	389
10. 9	375
10.10	392
10.11	420
10.12	406
11. 1	313
11. 7	337
12. 1	360
12. 7	365

第一年が可なり早い速度で増加していることが知られる。第二年の十一年、第三年の十二年にはやゝ減少して三百名台であるが、十五年には回復し、同年一月は四百四十七名、同六月の五周年記念号は四百八十八名、白秋の死の直前の十七年十一月には九百四十二名である。没後の十八年五月においても八百五十九名を維持している。このピーク時においても「多磨」と「アララギ」とで出詠者数にはなお可なりの差があった。即ち「多磨」創刊の月の十年六月の「アララギ」は七百七十四名で、「多磨」の約三倍であるが、右の十八年六月では「アララギ」が一千二百九名であるに對し、多磨は八百五十九名で、なお三百五十名の差があったのである。ただし初期の「多磨」は小売店の店頭売りがなされていた。筆者もそれを求め、その新鮮な魅力に惹かれた一人であった。したがって実際の刊行部数は出詠者より遥かに多く、発行所がアルスであった関係もあって広く普及していたものと思われる。十五年六月の五周年記念号によると支部の所在地は北から旭川、秋田、気仙沼、国学院大学、伊豆、恵那、京都、大阪、岡

山、琴平、北九州、大分の十二か所となっており、合同歌集の「多磨第四歌集」（昭一八、三）の出詠者は五百二十五名であるが、その住所は樺太、朝鮮、満州、南支、北支などを加えて大多数の道府県に及んでいる。広い社会的普及があったことがうかがわれる。

「多磨」はまた歌人層に普及したのみでなく国文学者、民俗学者、詩人たちにも関心を持たれたと思われる。次のような各分野の学者、詩人の研究論文随筆類が創刊号以来、しばしば寄稿されているからである。創刊号から三号までの久松潜一の「為家論」以下安藤正次、石井庄司、頼原退蔵、佐藤惣之助、坂元雪鳥、釈迢空、品田大吉、島田謹二、新村出、武田祐吉、戸川秋骨、豊田八十代、能勢朝次、萩原朔太郎、平田禿木、福士幸次郎、藤田徳太郎、峯岸義秋、矢野峰人らが寄稿者であり、鳥類学者内田清之助も随筆を寄せている。西角井正慶（見沼冬勇）のように作品と共に独自の研究論文「神楽歌研究」（一ノ三以降断続発表）のごときを寄せたものもあったのである。

隆盛のピークを迎えた時期が戦争の厳しい時代と重なり、早くも刊行の苦痛を経験せねばならなかったことは皮肉な運命であった。しかし「多磨」はその出発期から当時の風潮たる国民主義的古典尊重の態度を新しい象徴主義的方法によって美的に表現することによって多数の支持を得たのであるから、この運命はそれ自身に内在していた、己むを得ないものであったとも言われよう。

大東亜戦争に突入したのは十六年末であるが、翌十七年二月号は表紙に「大東亜戦争」と朱書した特集号となっている。巻頭には白秋の「皇軍頌」の詩がある。「海ゆかば水づく屍……」の歌詞を前書きに据えた

「轟けよ、万世の道の臣、大御軍いざ奮へ、いくさびと揺りとよむと」ではじまる、絶対主義讃仰の詩である。そしてそのあとに反歌風な次の一首が加えられている。

天皇の大御軍の行くところ神ましませり向ふ敵なし

十八年五月、先に触れた「多磨第四歌集」が刊行されたが、これが合同集の最後となった。既に白秋死後であるため巻頭の白秋の「序に代へて」は前に引いた十六年七月の巻頭言を転載したものである。

戦中から戦後へかけての「多磨」の作品は次のようなものである。

亡骸に火がまはらずに噎せたりと互に語るおもひ出であはれ

レキシントン号空しと聞けば残りたるわが憎しみはサラトガにあり

まじまじと此方向きある俘虜ひとり怡しむが如き薄笑ひせり

艇今しいでんとぞ澄むみ命のいよ幽けし枚衝みたり

疎開すべき疎開せしめてこの町は街上にゆふべ遊ぶ子もなし

よろめきて煙吐くと瞻る間もあらず逆揉みにグラマン戦闘機墮つ

月の光焼け跡の街衢に照りわたり骨片のごとき瓦礫の集積

いきどほりはたやあへなし甘藍の結ばざるいくつ扱ぎ捨てむとす

これらはさまざまの姿の苛酷な現実を伝えているが、なお余情的詠嘆が見え、作者が初期「多磨」以来の人々であるため、手法的に新幽玄調の余韻が響いている。

白秋没後の「多磨」は集団合議制をとって刊行され、編集委員会が設けられ、編集者は木俣修↓泉甲二↓中村正爾と移行したことは前に記した。選者ははじめ、十九年七月の時点で穂積忠、木俣修、中村正爾、荒木暢夫、鐔木孝、泉甲二、岩間正男の七名であった。戦後の二十三年二月には選者ローテーション制をとり、(同月「多磨」月報欄による)上記の人々に宮柊二、鈴木英夫を加えた形で実施された模様である。終刊直前の二十七年八月の選者は、木俣修、鐔木孝、中村正爾、宮柊二であった。

宮柊二 (昭二七、二)

鈴木幸輔 (シ二七、二)

中村正爾 (シ二七、五)

初井しづ枝 (シ二八、五)

木俣修 (シ一九、九)

岩間正男 (シ二〇、五)

荒木暢夫 (シ二〇、一二)

鈴木英夫 (シ二一、六)

戦争の最も酷しい時期の昭和二十年、戦後の二十一年の「多磨」は他誌同様ザラ紙十数ページのものとなった。「二ヶ月の時日を費して苦心印刷を了した（注、二十年）二月号は、製本所に於いて戦火の為に灰燼に帰してしまつた。」という如き状況で、やむを得ず二十年の二、三月号は残存した紙型で二月号の一部を加え、合併号を出したのである。「新年特輯・決戦歌集号」とある二十年一月号の出詠者は四百三十名である。終戦直後の二十年十一月の歳末号は一、二部計二〇名、三部百十名、計百二十名で、全一五ページである。第一部会員の作、二三を抄出する。この時第三部には田谷鋭、吉野昌夫、安立スハル、中村純一ら諸氏の名が見える。

焼け跡の瓦礫をおほひはびこれる糸瓜すずしき朝の風なり

荒木暢夫

蘇満国境にありし吾子はや時久し探ぐる術なし雪深からむ

泉 甲二

声高に誠足らはぬくさぐさの歌ありしかな思ひみむとす

岩間正男

裁かるるもの誰彼といふこゑの騒然としつつ五十日経にけり

木俣 修

野を行きてひびくいのちの寂しさに青き蝗も食はむとぞ思ふ

吉野鉦二

終戦直後の悔恨と戦争責任に対する恐怖感、生活の逼迫感が詠まれ、「多磨」風象徴は殆ど見られぬ、現実感の強いものとなっている。

その後、出詠者は少しく回復し、二十一年一月は二百五十七名、二十五年一月は一部二十三名、一、二、三部合計三百十七名。終刊の二十七年十二月の自選集は四百七十八名である。終刊程近い二十五年においても新入会員は月々十余名ないし二十名内外が報告されているから、その後も新入者を得て戦前期に近い形に復活する可能性が無かつたのではないと思われる。

雑誌の体裁、内容は二十三年から徐々に回復した。二十三年からは「北原白秋・人と芸術」が会外先輩で白秋と

ゆかりの多い前田夕暮、矢野峰人、信時潔、川路柳虹、内藤銀策らによって執筆され、志田延義の「梁塵秘抄講義」(昭二二、一↓二三、三)が連載され、会の内部では中村純一氏の「桐の花の一視点」(昭二五、一一)「多磨今昔」(木俣、宮、岩間氏ほか九氏、二四・六)の如きがある。

しかし、二十七年八月号(七月合併)はとじ込みの大きい特別ページに「多磨の解散に就いて」を発表した。その宣言は八月十七日付になっている。そしてこの解散は白秋の死の直後真剣に考えられたということ、哀悼の中でその実行が出来なかったということ、戦中は文化の圧迫と悪統制に喘ぎつつ刊行を続けて苦難の道をたどり、白秋精神の宣揚に尽したと記す。また白秋は生前、「孟夏警策」に「多磨は家代々、後までも名目を重んじてこれ続けてゆかねばならぬことは決してない」と言ったと述べる。その白秋の遺志を体し、白秋十年祭を迎えるに当って「個々に先師白秋の血脈を血脈として新しき再出発の壮途に就かんとするものであります」と述べ、会員の諒承を得て、終刊号への自選歌の提出と「多磨短歌会」の解散後に生まれる予定の親睦機関「多磨会」への参加を求める記事がある。

「多磨」の終期における歌風は戦前のそれのように一つの公約数を持ったものでなく、また先に戦争直後の作について見たのと同じように現実調を濃くしたものであった。このことについて「多磨」会員の鈴木英夫氏は「最近の多磨歌風私観」(昭二五、一)で次のように述べており、内部においても論議があったことが知られる。

「多磨は何を目ざさうとしてゐるのか。多磨の主潮は何処にあるのか、といふことが昨年の八月の湯沢大会の折にも問題になった。たしかに以前の多磨は——殊に白秋の生前には——非常にはつきりした一つの歌風を持っていた。現在に於てはさうした意味での歌風といふものはかなり稀薄となっている。……」「明確な歌風」の消失は「多磨」だけの傾向でなく、「多磨」は思想、イデオロギーの点でも様々の人が集まっており、「現在は従来の結社組織よりも」複合体組織だという。そしてその時期の「多磨」の持つ種々の傾向を分析し、過去の「多磨」歌風につながりつゝ現

在を生かしているもの、口語脈へ接近するもの、即物的、散文的詠風のもの、心の深淵にメスを向けるもの、心象を遠心的な対象に投げるものなどがあるとす。こういう種々の傾向があるが、全体的には自然詠の比率が高いといふ。筆者は戦後の「多磨」はこの時期に至っても総合的に現実化生活化の傾向が強いことを加えておきたい。鈴木氏説を参考としつゝ同氏の引用されていない作数首を抄出した。

飛ぶ蠅のやや早き音を聞きて立つわが棄てて従弟の継ぎにたる店

首相吉田の国にきたりて伝次郎秋水の墓にわれは思ふも

井戸をいくら掘下げてアメリカに達せず個人を掘下げて社会は見えず

象徴の具になさむかな山沢に水芭蕉のしろき苞立つ

つやめきし蛙のこゑも季^{とき}すぎて四方の草群に音あらき雨

夏青葉かさみて翳の深むのみ思想は絶えて声にひびかず

デリシヤスの生^なりのゆたけさこの園に霜近き日の日ざしは澄みて

水仙は黄の蕊に老けしみだれありおのづからなることの淋しく

こうして「多磨」は終幕に近づいたのであつた。終刊号の出詠者は四百七十八名である。これらの人々の中には戦中もしくは戦後参加と思われる人々も相当数含まれているが、終刊号の「先師没後」(宮柎二)「多磨女人群像」(鐸静枝)などの記事によると早くから参加していた人々も多い。これらの人々の終刊後の動静を個々に明らかにすることは容易でない。しかし、たとえば初井しづ枝、田谷鋭両氏が「コスモス」に加わつたように、「多磨」末期の主要同人が創刊した「コスモス」(宮柎二)「形成」(木俣修)「創生」(後井嘉二)「新樹」(異聖歌)「中央線」(中村正爾)「長風」(「コスモス」より。鈴木幸輔)などに参加し、それぞれの個性に応じつゝ、白秋のローマン精神の遠い遺響を伝えることと

宮柎二 (昭二四一、二)

岩間正男 (昭二五、一)

大内規夫 (昭二五、四)

酒井広治 (昭二五、七)

鐸木孝 (昭和二五、八)

若林牧春 (昭二五、一二)

木俣修 (昭二七、一)

初井しづ枝 (昭二七、三)

なった。先に引いた終刊宣言の中にあるように白秋の血脈は個々の人々に継承されたのである。

「多磨」の解散については二十七年二月の論集会の席上木俣修氏が提示され何回かの討議の後断行されたという。(終刊号「多磨短歌会の解散について」木俣修) すぐれた素質と傾向を異にした作家の多かった「多磨」において、たゞ白秋につながるという縁だけで一つの集合体を形成してゆくことは無意味なことだったとされる木俣氏の考えは戦後の混乱のまだ続いていた時期と会内部の客観的人間関係に即して考える時当然な状態分析だと思われる。核分裂は起るべくして起ったのであり、その分裂以前の原核であった白秋の文学者として豊かな天分、牽引力がしのばれる。

「多磨の解散に就いて」の宣言の精神はその後確かに実現されたと見るべきである。

本稿は昭和四十七年十月七日の和歌文学会十八回大会(会場二松学舎大学)における講演を基礎に稿を改めたものである。その講演の時点で資料のご提供にあずかった宮格二氏、森美祢氏に深く謝意を表したい。